第6章　ノモとカンター：「アメリカの正義」への熱狂と憤慨

柏　岡　富　英

1．新しいスターの誕生

1995年7月12日、元近鉄バッファローズで現ロサンジェルス・ドジャースの野茂英雄投手が、こともあろうにアメリカ大リーグのオール・スター・ゲームの先発投手として登板し、しかも2回を奪三振3の無失点に抑えるという快挙をとげた。野球ファンはもちろんのこと、ふだんは野球を見ない多くの日本人も、このときばかりはテレビの衛星中継にかじりつき、『日本経済新聞』の春秋子の記したごとく「2回が終わると、ホッとする」ほどに、野茂投手の一挙手一投足に見入ったのであった。

この「事件」は、五大紙がすべて12日夕刊1面にカラー写真で大きく報じたうえ、翌日朝刊では、『朝日』をのぞく四紙が「社説」か「1面コラム」(『産経』と『読売』は両方）でとりあげるほどの熱の入れようであった。しかも『朝日』、『毎日』、『産経』が、夕刊の見出しに「野茂」ではなく「NOMO」を使ったのは大変意味深いことであった。それは「産経抄」子の言うごとく、彼が「アメリカ“全国区”」になったことを喜んだものである。アメリカのメディアでも「日本からの最良の輸出品」、「アメリカ人はほとんど忘れかけていたタイプのスポーツヒーロー」という評がなされたという（いずれも『読売』、1995年7月13日)。「NOMO」は米国で最も有名な日本人となった。

これに先立つこと十日あまり、もう一つの「事件」が6月29日の夕刊と6月30日の朝刊で、ほぼ同様の扱いを受けている（五大紙全部が29日夕刊1面トップと30日朝刊の社説、『読売』と『毎日』をのぞく三紙が「1面コラム」)。いうまでもなく「日米自動車交渉決着」である。この前後、ミッキー・カンター米国通商代表は、日本で最も有名なアメリカ人の一人となった。

アメリカの国技である「ベース・ボール」に単身乗り込んで、見事トップ・プレーヤーの座を獲得した野茂と、アメリカ文化の象徴である「自動車」をめぐって、あくまでもタフにアメリカの主張を押し通したカンターは、はからずも、互いに「最も重要なパートナー」であるアメリカと日本の関係を具現することとなった。しかし二人の具現者を見る目、二人の背後に見えかくれするアメリカ像には大きな隔たりがあった。

カンターや、彼の代表するアメリカ政府の評判は、どう割り引いても芳しくなかった。「制裁を振りかざして譲歩を迫る米国の一方的措置」(『朝日』）や「ルール違反」(『読売』）といった論調はすべての社説に共通していたし、『産経』にいたったは「自らが検事、裁判官となり死刑執行人まで兼任するような一方的制裁措置の発動」とまで書いた。（もっとも各紙とも「喧嘩両成敗」の原則に則って、日本の非を指摘することも忘れなかった。）

一方野茂投手については、この若者自身への賞賛は無論のこと、アメリカ社会やアメリカ人に対する高い評価が目立った。「才能を素直に評価するアメリカという国の奥行きの深さ」(『読売』)、「才能を愛し個性を尊重する社会」(『日経』)、「実績を認めると最高権威のゲーム先発に起用するアメリカのフェアさ、懐の深さ」(『産経』) など、手放しの誉めようである。

しかし何かヘンではないだろうか。わずか十日ばかりを隔てて、同じ新聞が同じ国に対して、これほどまでに違った評価を下すというのは一体どういうことなのか。野茂を受け入れたアメリカ社会をたたえながら、カンターを送り出したアメリカ社会のことを思いだした人は誰もいなかったようなのである。少なくとも、十日前のことに一行でも触れた記事は皆無であった。これほど短時間の間に、これほどまで見事に評価が逆転するというのは、日本人は忘れっぽい、というような単純な話では片づきそうもない。二つの評価を一本化せよ、などという無理難題を言うつもりはない。二つの相反する評価が、互いに干渉し合うことなく併存していることそれ自体が、実に興味深い問題なのだ。

第二に、カンターの交渉手法については「実はアメリカでも、識者の間では評判が悪い」という類のことが書いてあるのに、野茂については、悪口を言ったりネタんだりしている「識者」(でも何でもいいが)」の話は皆無である。情報収集の偏りは、むろん、どこにでもあることだし、あんなに頑張った野茂に難癖をつけるなど、趣味がいいとは言えないだろう。それにしても「にっくき」カンターと「あっぱれ」野茂とに向けられる視線はあまりにも違いすぎる。カンターだってアメリカ人（とくにクリントン大統領支持の人々や自動車業界）の間では大ヒーローに違いはないのだ。私の関心は、この情報収集の偏りの背後に何があるのか、二人のヒーローを通して、記者や読者がアメリカ社会に関して何を書き、読みとりたかったのかにある。しかしその前に、もう一つ思い起こすべき事件がある。

2.「服部君射殺事件」

1992年10月、アメリカに留学中の日本人高校生が、ハロウィーンのパーティーに出かけようとして家を間違え、その家の主人に不審者と勘違いされて射殺される事件があった。この「服部君射殺事件」について、『産経新聞』の高山正之ロサンゼルス支局長が注目すべき論評を書いている(1)。

高山氏によると、この事件が日本で大問題になるにつれ、アメリカでも『ニューヨーク・タイムズ』などがこれをとりあげるようになるが、そこには必ず服部君が英語が話せなかった、すなわち「フリーズ」というスラングを知らなかったことが誤解の発端であったと指摘され、中には彼が、「フリーズ」というスラングが多用される西部劇を見ておくべきだった、などという記事さえあったことは、日本ではほとんど知られなかった。しかも多くの日本人の予想に反して裁判所は射殺者のピアーズに対して無罪の判決を出した。

しかしこれに対して日本では政府をはじめとして誰も公式に抗議を表明しなかったばかりでなく（これは、シンガポールでアメリカの少年がイタズラの罰としてむち打ち刑になったときのアメリカの反応とは大いに違うと、高山氏は指摘する)、むしろこの事件をきっかけにアメ

リカの善意が結集して、ついに「ブレイディ法」というアメリカ初の銃規制法が成立したことを高く評価した。その裏で「キャリー・コンシールド・ウェポン（CCW）法」なる法律が成立したことに日本は気づかなかった。

アメリカ憲法修正第2条には市民が銃を「持つ」権利を保証しているが、銃を「持ち歩く」ことは犯罪とされてきた。ところがＣＣＷ法はこれを合法化して「二十一歳以上の成人に実技テストを条件に銃所持免許を与える」法律であり、現在では全米二十五州で銃の持ち歩きが公認されるようになったという。

そこで高山氏は次のように主張する。日本では「アメリカは立派な国」という「刷り込み」が、とくに中年以上の人々の間では、なされている。「米国を立派な国だと信じあこがれた服部君の悲劇・・・の一端は、米国に対する特定の刷り込みをもって意識的にか無意識的にか情報操作をした人たちの責任もあるはずだ。」

むろん高山氏はジャーナリストとしての良心に基づいて、日本のジャーナリズムの体質に警告（自戒）を発しているのだが、はたしてこれはジャーナリズムだけの問題、「情報操作」をする側だけの問題なのだろうか。高山氏の言う「刷り込み」(別の言葉で言えば「ステレオタイプ」あるいは「選択的知覚」）という認識枠組みの中では、人はすでに形成されたイメージに合致したものだけが見える。あるいは、そういうものを積極的に探し求める。イメージに合致しないものは、ただ単に見えないか、見えたとしても無視するか、あるいは「例外」と位置づけて、元のイメージを維持しようとする。それはジャーナリストだけではなく、研究者、知識人一般、あるいは庶民の間で常に起こっている。むしろ、それが普通なのであって、よほどのことがないかぎり、それ以外の認識方法は困難だ。見識と合理性で現実識別をせよ、という高山氏の叱責は立派だが、それがいかにして可能なのか（社会の「正しい」認識とは何か、そもそも社会が一つのあるいはいくつか「原理」によって統合されていると考えること自体が正当なのかどうか)、あるいはそれがどれほど実現可能な叱責なのかについて、私は深い疑いをもつ。

私が興味をもっているのは、「刷り込み」を排して「正しい」認識を広めることではない。またアメリカが本当に「立派な」国であるのかどうかを検証しようなどとも思っていない。「アメリカは立派な国」という「刷り込み」が「見識と合理性」の観点から正しかろうと間違っていようと、それこそがアメリカをつき動かし、あるいはアメリカ人自身による現状批判の源泉となったのであり、ひるがえって、日本が自らを律する基準となってきたのである。野茂投手やカンター代表、あるいは服部君をとおしてアメリカや日本が見ている、あるいは見たいと思っているアメリカのイメージを確かめていくことが、本稿の目的である。

3．「さすがにアメリカ」と「これでもアメリカか」

亀井俊介氏は、かつて日本のアメリカ観が「さすがにアメリカ」と「これでもアメリカか」の間を極端に揺れ動いてきた、と書いた[(2)]。明治以来、そしてとくに第二次大戦以来、アメリカは日本にとって、よきにつけ悪しきにつけ、「文明」の最先端を象徴する国、自らのモデル

としてきた国であった。福沢諭吉から司馬遼太郎まで、中里介山から落合信彦まで、アメリカを訪れた人も、アメリカを実際には見たことがない人でも、飽ことなくアメリカ社会や文化を論じ、アメリカの政治や経済の動きに一喜一憂してきたのである。いま、たとえば駅前の小さな本屋さんに立寄って文庫や新書の棚を一瞥しただけで、数十冊の「アメリカ論」を直ちに見つけることができるだろう。世界中のどこに行っても、ある特定の国に関する本が、これほど大量に、しかも一般読者を対象にして売られている国はないだろう。

しかし、このような「アメリカ論」を読み返してみると、そこには、ごく大ざっぱにいって二つのカテゴリーに分けることができる、と亀井氏は言う。その一つが「『さすがにアメリカ』といった感嘆賛同をこめたもの」であり、他方、こういったアメリカの理想化は「そのイメージと合致しない現実のアメリカに出合って幻滅した人たちのあいだに、『これでもアメリカか』という思いを抱かせることにもなった」(3)。亀井氏の観察によれば、このようなきまりきったパターンの繰り返し以上に出ることが難しかったのは理念によってアメリカを見、理念によって日本と対比する態度に由来する。

日本は「なかなか理念がかった国」なのである。しかし実は観察対象であるアメリカ自体もきわめて理念的な国であることにも原因であるという指摘は、きわめて重要である。

> アメリカくらい自国のあるべき性格を内外に誇示してきた国は、世界に例があるまい。・・・こういう自己の理想の誇示はその後も続いたので、いわば努力目標であるべき理念が、まるでアメリカの現実であるかのごとく外国に伝わることになった。・・・「百聞は一見にしかず」というが、日本人は開国直後からアメリカの理念を百聞し、それによってアメリカのイメージを描き続けた。そして実地を一見したとき、あるいは実地を見なくても、アメリカの政治的、社会的、文化的な実際上の行動を一見したとき、百聞のイメージと少しでも合えば「さすがにアメリカ」と賛嘆し、少しでも違えば「これでもアメリカか」と憤激した(4)。

このような理念先行型の割り切ったアメリカ解釈によって日本では

> 自由平等の国、国際道義の国、キリスト教の聖地、機械文明の国、女権の国などという論と、その逆の人種差別の国、侵略主義の国、金銭万能の国、低俗文明の国、性的退廃の国などという論が、振り子のように揺れるだけで、いわばモデルとなるか、逆モデルとなるのかのどちらかに、アメリカはさせられてきたのである(5)。

この「さすが」と「これでも」は、冒頭にあげた「NOMO」、「カンター」、「服部君」という三つの事件の報道に見事に表れている。亀井氏は、この二つのパターン以外にも、「ライフとしてのアメリカ」とでも呼ぶべき、より柔軟に、生きた形でアメリカをとらえる試みにも言及するが（「さすが」亀井氏！）、そのことはここでは触れない。また日本の側の「理念がかった」解釈そのものの歴史的由来や社会的構造・機能……つまり上の引用で言えば、なぜアメリカがそう「させられてきた」のか……を詳しく分析する余裕もない。ここでは日本人がアメリカ人によって理念化され、美化されてきたアメリカ観をかなり単純に受け入れ、あるいはかなり単純にそれに反発してきたこと、を前提とした上で、この理念化され、美化されてきたアメ

リカ観の内容を探っていくことにする。

4．アメリカと立身出世

アメリカの文化、とくに大衆文化の重要なテーマは、努力さえすればどんなことでも達成でき、どんな人間にもなれるという、自己変革への信仰である。いうまでもなくアメリカは移民によって成立してきた国であり、これは旧世界を後にして海を越え、新しい大陸へ移住することで、自らも新しい人間になることを意味していた。イタリア系であろうと日系であろうと、移住が「祖国」からまとってきた「民族の属性」は時とともに失われ、ついには政治的、経済的、社会的決定要因として意味をもたなくなるはずであった。

さらに言うと、アメリカへの移住者は必ずしも宗教的被迫害者というわけではなかった。宗教的迫害が動機となって新大陸に移住した人々にとって、新しい宗教的コミュニティーをつくり、使命を全うすることが重要であったのはまちがいないが、実は非宗教的な移民（たとえばイギリス政府によって強制的に送り出された犯罪者、浮浪者、貧民、スコットランドやアイルランドの戦争犯や政治犯、ボルティモア卿の寛大な土地政策にひかれ、一獲千金を夢見ててメリーランドに移住した移民、さらに19世紀半ばの「馬鈴薯飢饉」によってアイルランドから移民してきた農民など）にとっては、自己変革は宗教的移民よりももっと切実で、直接的な動機であったに違いない。

移民の多く――とくにユダヤ人、イタリア人、ポーランド人など、「熱烈歓迎」というわけにはいかなかった人々――が、エリス島での入国審査の際に名前を変えたことはよく知られているが、これは彼らが新しい国で新しいアイデンティティを獲得しようとしたことを象徴的にあらわしている[6]。もっとも、移民審査官が、難しい名前をうまく書き取れなくて適当な名前をでっち上げたこともよくあったらしいが、「改名」が強制的であったか自発的であったかは、結果として新しいアイデンティティが作に出されたということだけについて見れば、大した違いはなかったかもしれない[7]。

フレデリック・ジャクソン・ターナーの有名なテーゼにあるように、「フロンティア」はアメリカ人の自己形成の根底をなしている。新しいアイデンティティを獲得し、新しい人間になるというテーマは、独立革命そのものが達成しようとしたものであった。S.M. リップセットの本が示すとおり、アメリカは「世界最初の新興国家」であった。国家そのものが変革によって新しいアイデンティティを獲得したと同じように、この国への移民も、自発的にせよ他発的にせよ、旧世界での「ルーツ」を断ち切って、「第二の人生」を踏みだし、個人の才能と努力によって、億万長者になる夢を見ることができたし、実際にその夢を現実（億万とまではいかなくても）とした人は少なくなかった。ホレイショ・アルジャーが生み出した数多くの立身出世物語や『グレイト・ギャッツビー』といったフィクションから、アンドルー・カーネギーやアブラハム・リンカーンといった実在の英雄にいたるまで、変身による大成功はつねにアメリカ人の心をわきたたせ、世界中の変身願望者のあこがれの的となってきたのである。世界を席巻してきたハリウッドにしても、立身出世は作品のテーマとしてもっともポピュラーであるに

とどまらず、古くはチャリー・チャップリンやマリリン・モンローから現代のアーノルド・シュワルツネッガー、シルベスター・スタローン、クリント・イーストウッドといった代表的なスターの人生そのものが、変身による立身出世物語であることは覚えておかねばならない。

高い社会的地位に生まれつき、裕福なよい家庭に育ち、高度な教育を受けたものが、高い社会的地異と、大きな富と、幸福な家庭を得るのは当たり前のことであって、そこには夢やエクサイトメントの要素はない。そういう人は「アメリカン・ヒーロー」になれないばかりか、むしろ不興を買うばかりである[8]。固定的な階級社会はアメリカの建国の理念に反する。何世代にもわたる移民たちは、まさにそういう社会に見切りをつけ、そうではない社会を目指してアメリカを形作ってきたのだから。

アメリカは強者の存在を否定しない。むしろ弱者が個人の才能と努力によって強者に成り上がることこそ「アメリカン・ドリーム」の神髄なのだ。しかし、強者が強者のままで固定されてしまうこと、社会移動や変化がブロックされてしまうことをアメリカは恐れる。いいかえれば「アメリカン・ドリーム」は、根底において不安定の要素を含んでいる。固定化の閉塞感が社会に蔓延し始めたとき、アメリカはその状況をヒーローの登場によって打ち破ろうとする。西部劇のヒーローは典型的に、金権や政治権力をのばし固定化しようとする組織力暴力に対して、どこからともなく現れ、正義が回復されたあとはどこへともなく立ち去っていくものと相場が決まっている。さすらいのガンマンが、事件解決後、町の名士におさまるのでは話にならないのだ[9]。

1990年代のアメリカは、大きな閉塞感に襲われてきた。双子の赤字と経済全体の停滞、ホームレス、犯罪や麻薬の蔓延、エイズの恐怖、ベトナム戦争やウォーターゲート事件を引き金とする政治不信の長期化。アメリカの悪夢であった共産主義は一挙に崩れたが、それはいわば敵が一人で転んだようなもので、アメリカが「撃ち殺した」ものではなかったし、第一、逆説的ではあるが、カブトの緒をしめるべき相手、もっと言えば「スケープ・ゴート」がいなくなってしまったことは、アメリカの志気にとって目出たいとは言えなかった。

「NOMO」をアメリカの救世ヒーローに見立てるのは、いくらなんでも酷だろう。しかし、スポーツがアメリカであれほど人気をもっているのは、それが出身階層にかかわりなく、個人の才能と努力の世界だからであり、お上品と知性の世界に対するアメリカ人の根本的な不信感をストレートに表現できる機会を与えてくれるからである。スポーツでは強いヤツが勝つのだ。このスポーツの世界で、しかも国技であるべき野球が、金銭がもとのトラブルで未曾有の長期ストライキにはいってしまった。いかにビジネスの国とはいえ、選手組合と経営者連合との諍いのせいでスポーツが行われなくなるのはファンにとって不愉快であったに違いない。それは、まがりなりにも「夢」を託すことのできる世界が、徹底的に経済の論理に汜されていることを示すものであった。繰り返しになるが、西部劇のヒーローの敵は、往々にして東部の大会社なのである。

NOMOは変身による立身出世のヒーローである。「野茂」が「NOMO」になり、アメリカのジャーナリズムが「トルネード」という和製ニックネームにかわる、もっとアメリカ的なニックネーム探しに躍起になっているのは、この点からして実に興味深い[10]。

5．「タフ・ガイ」

カンターの場合は、日本で最も有名なアメリカ人になったけれども、野茂とは様子が違う。カンターは日本人にとって「これでもアメリカか」を代表する存在であり、その背景には、自己利益のためにはなりふり構わず強権を振りかざす、暴力的支配者としてのアメリカがちらついていた。むろんヒステリックなまでの自己主義は、アメリカ社会の内側でも、また外交関係においても、アメリカ最大の特徴の一つである。西部開拓史におけるマニフェスト・デスティニーの伝統から「クー・クラックス・クラン」まで、またキューバをめぐる「ミサイル危機」やベトナム戦争から中国に対する「人権」の押しつけまで、世界を二分して、自らは善、それに敵対するものを悪と決めつけ、「善」を押し通そうとする潔癖症の二分性は、アメリカ史の全体を貫いている。フランスの社会学者ミシェル・クロジェは次のように述べる。

> 絶対的な善と絶対的な悪という二分性――「彼は有罪か。イエスかノーで答えよ」――の論理は、答えがノーであるときには非人間的であるだけでなく、バカバカしい結果をもたらす・・・。ことあるたびに裁判にもちこみ、手続きに執着するという習癖は、この二分法の論理によって説明がつく。それはまた他人を理解するとか、少し丁寧に他人とつき合ってみるとか、あるいは自分を他人の立場に置いてみる・・・といったことに関する驚くべき無能の源でもある[11]。

ところがこの世にはアメリカの意にそわないもの――すなわち「悪」――は、当たり前の話だが、確かに存在するのである。自己の「善」に絶対的な信頼をおいたうえで、そういう「悪」と対峙しなければならないとき、アメリカに残された手は、アメリカ式の「善」を相手に押しつけるか、それが受け入れられないときには相手を叩きつぶすかのどちらかしかない。

西部開拓におけるフロンティアーの経験が、この二分法の原型であることは疑いない。フロンティアーとは、文明と、文明の及んでいない「自然」との境目のことである。しかし「文明」と「自然」との関係はアメリカへの移民の歴史を通じて特異な展開を遂げることになる。すなわち、ヨーロッパの伝統的な考えによれば「自然」は、文明の腐敗の及ばない、神によって聖別された場所であった（このイメージは聖書に頻繁に登場する）。ピューリタンたちも、ヨーロッパ文明の腐敗を逃れて、聖なる新大陸に「隠れ家」を求めて移住したのである。しかしイギリスのラディカル・ピューリタニズムの神学の中には、伝統的な自然観を覆す萌芽がすでに含まれていた。この新しい考えによると、自然はキリストの再臨までの間に、人間が科学的探求や労動によってつくりかえるべき対象へと変化した。アメリカでは自然は聖別されたものであるどころか、神の意志に従って開拓すべき対象へと変化していく。自然を征服し文明を及ぼすことが神の意志にかなった、アメリカの至上命令となったのである[12]。

この至上命令――「マニフェスト・デスティニー」――は、19世紀の半ばに西部開拓がカリフォルニアに達し、地理上のフロンティアがなくなった後も、アメリカの文化的伝統として根強く生き残る。フロンティアは探そうと思えばどこにでも探せるのだ……自然の中だけではなく、文明のただ中にも、人間の体や精神の中にも。そしてアメリカの中だけではなく、アメリ

カの外にも。都市再開発や「貧困との闘い」、ジョッギングや精神分析、あるいは共産主義との闘いや第三世界への開発援助、「人権外交」など、アメリカを特徴づけるものの中に「現代フロンティア」とみなすことのできるものは数多い。「征服」の内容や対象は変わっても、フロンティアの探究はアメリカ文化の根幹をなしているのである。さらに言えば、アメリカは「アメリカの栄光」を及ぼすべき「ワイルド・ウェスト」を見いださずには「生きた心地」がしないのだ。しかも「ワイルド・ウェスト」はワイルドであればあるほど、アメリカの使命感や道義感を燃え立たせる。そういう逆境に雄々しく立ち向かう精神的・肉体的活力を失うほど、アメリカ人のアイデンティティを損うものはない。

アメリカは、あるがままの現状を受け入れて安閑としていることができないのだ。望ましい状況の実現に向けてつねに活動していなければ生きていけないし、生きている値打ちがないのである。しかもこの使命感の達成は、誰かに命令されて行うのではなく、自由な個人が自発的に行うものでなければならない。ペリー・ミラーによるとアメリカにとって理想の社会とは「正しい人間が自らの意志と選択にしたがって、正しいコミュニティを築きあげ運営していく」ことのできるような社会なのである(13)。ミラーはまた次のようにも書いている。

> ピューリタン国家は・・・人間の意志の産物であり、彼らの理性の法にしたがうものではあるけれども、同時に神によって支配されているのである。・・・自由意志と絶対的命令とはしっかり手を握りあっていたのである(14)。

ピューリタンの理想にしたがうと、個人の意志と選択に基づく行為は「コミュニティ」と結びついていなければならない。行動の自由はアメリカにとってほとんど強迫観念と呼べるほどに中核的な価値ではあるけれども、それは「勝手気まま」を意味するのではない。個人の行動が「正しい」かどうかは神の意志にしたがった「正しい」コミュニティの建設と維持にどれほどの貢献をなすかどうかによって判断されるのである。トックビルが、アメリカを自由な個人による自由結社の社会であると特徴づけたのはよく知られているし、その後も「個人」と「コミュニティ」とに関する論考は数え切れないくらい書かれてきた。この膨大な文献をていねいに見直すことは、本稿の限界をはるかに超えるが、アメリカ人の行動の変化を「内的志向」と「外的志向」という概念であらわし、日本でもよく知られているデイビッド・リースマンが次のように述べていることは注目に値する。

> 多くの観察者にとって・・・自由放任主義経済や功利主義哲学などのスローガンのもとに、外的な束縛から解放された人々は、荒々しくまた毒々しい個人主義者、覇権主義者に見えるかもしれない。しかし・・・「個人主義」を押さえ込もうとして動員される集団的制裁に抗して、彼らが超然としていられるのは、彼らが自己抑制の規範をしっかりと内面化していたからに他ならない。・・・過去三百年、開拓や植民地建設あるいは産業といったフロンティアの先頭に立ってきた勇猛果敢な人々は、ふつう一定の社会規律にのっとって行動し・・・高い道徳的原則を胸に抱いていることが多かった・・・。私が「内的志向」と名付けたのはこのような人々の特性である。彼らは内面化された目的や理念にしたがって行動したために、実際よりも個人主義的に見えた。・・・そして彼らが内面化した理念は、古い伝統の残存物を多く含んでいたために、彼らは

往々にして温情主義的であり、自由主義への名目的な信念にもかかわらず、彼らのもたらした革新によって引き起こされた諸問題を解決することにも意を用いた[15]。

むろん『孤独の群衆』におけるリースマンのテーマは「内的志向」から「外的志向」への移り変わりであったし、その後さらに「仲間志向」に移行したと述べている[16]ように、「個人主義」そのものの内容は、この数十年間で大いに変化した。しかし引用の最後の部分に関して、アメリカの「フィランスロピー」の伝統が、今日も脈々と息づいていることを指摘しておきたい。カーネギー、フォード、ロックフェラーといった経済界の雄が財団をつくって大学や美術館あるいは病院や図書館に大金を投じたのは、たしかにアメリカ的伝統と呼ぶにふさわしい。彼らが、自らの努力と才能によって稼ぎ出した大金を「コミュニティ」のためにつぎ込んだのは、罪滅ぼしという以上の「義務感」に基づくものであった。カーネギーが、フィランスロピーの事業を「富の福音」という宗教的タームで表現したことは、この点から大変意義深い。アメリカの資本主義は、他のどんな資本主義と較べても遜色のないほど毒々しいものであることは間違いがないにしても、その背後に宗教的な正義感が様々な形で存在していることは見逃してはならない。

アメリカの個人主義の原点に個人的な動機のみを求めようとするのは間違いである。そこには「コミュニティ」と「正義」の観念がつねについてまわる。やっかいなのは、先ほどのクロジエの指摘のとおり、この「正義」が二分法の論理――「彼は有罪か無罪か」――と結びついていることである。アメリカ的な正義が相手側にとっても正義であるときには「千万人といえども吾往かん」というアメリカの勇猛果敢ぶりは拍手喝采を受け、「さすがアメリカ」を再認識させることになる。その逆の場合には、もともとアメリカの正義を信じている人々の間では「それでもアメリカか」という反応を引き起こし、はじめからアメリカを評価していない人々の間では「しょせんアメリカ」という嘲笑を招くだろう。（ちなみに基本線でアメリカを評価していない人が、ある特定の案件に関してアメリカの行いを好ましいとみなす場合には「はからずもアメリカ」となるのだろうか。）

「正義」の観念に支えられた「タフ・ガイ」というテーマは、「西部のガンマン」に典型的に見られる。彼らは多くの場合、限定された地域という意味でのコミュニティの住民ではなく「流れ者」ではあるが、アメリカという「想像されたコミュニティ」[17]の住民であることには変わりはない。インディアンやメキシコ人、あるいは東部の大企業がアメリカの正義を脅かす悪である、という合意が成立しているときには、どこからともなくあらわれた「西部のガンマン」が正義をまもってくれた。（むろん、インディアンやメキシコ人や東部の大企業にとっては、迷惑な話だった。）全体主義や共産主義や伝統主義がアメリカの正義を脅かすものという合意が広く行き渡っているときには、大統領や五つ星の将軍に率いられた軍隊がそれらを蹴ちらしてくれた（むろん、共産主義や全体主義者や伝統主義者にとっては、迷惑な話だった。）

日本人が、日本は遅れている、もっと「近代化」しなければならない、と知識人にしかられ、それはその通りだと悩んでいたころ、「よい社会」のモデルは圧倒的にアメリカであった。叱りつけた知識人にとっても、その叱責に真剣に耳を傾けた一般の人々にとっても、日本の「近

代化度」をはかる物差しはアメリカであった。そこで日本人は、ジョン・ウェインにしびれ、「怒れる十二人の男」に感動し、マッカーサーに感謝し、ケネディに憧れ、キング師に心からの拍手を送った。しかしカンターと、彼が代表するアメリカのやり口には悪口雑言の限りを尽くした。

だが、ジョン・ウェインがインディアンの酋長と部族に臨む態度、ケネディがフルシチョフとソ連に臨む態度、キング師がクー・クラックス・クランと白人エスタブリッシュに臨む態度、マッカーサーが天皇と日本に臨む態度は、カンターが橋本龍太郎と日本に臨む態度と基本的に違っていたわけではない。彼らはいずれも「アメリカの正義」を背景として、敢然と悪に立ち向かう「タフ・ガイ」のヴァリエーションなのである。

むろんアメリカ社会における「タフ・ガイ」の位置づけは、西部開拓時代から今日まで様々な変遷をとげてきた。組織や科学やマスコミが支配する社会と「ワイルド・ウェスト」とでは、「タフ・ガイ」のタイプも変化せざるをえない。にもかかわらず、たとえばランボーやロッキーといったフィクションに話をかぎっても、そこにはやはり「アメリカ人がフロンティア時代からつちかってきた原初的な生命力を発揮する自由人——肉体と精神を極限にまで活動させ、苦境をしのぎ、いろんな意味で非人間的な世界に人間的な価値を実現するものの姿がある」[18]。いやむしろ、組織や科学にがんじがらめになっているからこそ——亀井氏の言葉では「非人間的な世界」であればこそ——アメリカの「原初的な生命力を発揮する自由人」へのあこがれは、いっそう強くなるのかもしれない。

「タフ・ガイ」が活躍するための必要最小限の条件は、自然環境であれ経済環境であれ、あるいは政治社会環境であれ、「アメリカの正義」を脅かす悪の存在である。日本の経済は個人の選択の自由を束縛する、まさに「非人間的」な制度だと、アメリカ人の目には映るらしい。そして、その非人間的な態度がアメリカの経済をいためつけているとしたら、野蛮であれ不作法であれ、あるいは（WTOの規定にしたがえば）違法であれ、「タフ・ガイ」は、それに立ち向かい、相手を叩き潰さずにはいない。いやむしろ、野蛮や不作法や違法は「タフ・ガイ」の典型的性格と言わねばならない[19]。

カンターは、むろん役者として小粒であるし、「タフ・ガイ」につきものの明るさ、親しみ、清廉潔癖というイメージをもたない。その姿勢がよくないし、顔つきもやや陰気だから、一般的な意味での「タフ・ガイ」のイメージには合わないかもしれない。しかしこれらは、「タフ・ガイ」の本質にとっては二次的な性質である。「敵ながら天晴れ」などというのはよほど特別の例外であって、攻め込まれる側にしてみれば、「タフ・ガイ」などというのはイヤな人間に決まっている。先ほど引用したウィルキンソンも、アメリカ史上最もタフであるとされるアンドルー・ジャクソンやジョージ・パットンに対する評価がさまざまであることを指摘したうえで、タフ・ガイへの強いあこがれが、そのうらで、過剰な攻撃性への警戒心を呼び起こしてきたと記している[20]。カンターの交渉スタイルがアメリカ国内でも批判の対象となっていることは既に紹介した。「あこがれ」と「恐怖」という二面性を解決るために、「タフ・ガイ」の観念の中に自制心や道徳性が組み込まれることになるが、それは基本的にアメリカの正義を信じるものの立場であって、アメリカの正義を自らの正義としない側にとっては、「タフ・ガイ」が

嫌悪すべき存在であることに変わりはない。

カンターも、時代が時代であれば、すなわち日本が教科書的なアメリカの民主主義や自由主義経済を全面的に受け入れていたころであれば、「正義の味方」として、あるいは「内的志向」の具現者として、好ましいタフ・ガイの評価をえたかもしれないのである。しかし、「いつ」と特定することはむつかしいが、日本はアメリカの正義に疑いをもち始めた。逆に言えば、日本はつい最近までアメリカの正義をあまりにも純真に受け入れて来すぎた。その傾向は、社会学や「文化評論」においてとくに顕著であった。ここでは詳しくとりあげる余裕がないが、いわゆる「日本特殊性論」における日本評価の浮沈、あるいは日本は特殊であるかどうかという関心そのものが、「アメリカの正義」への評価と表裏一体をなしてきたことは指摘しておきたい。

カンターは「アメリカの正義」への信頼が確かでなくなった時代に登場したために、気の毒な評価を（少なくとも日本では）受けることになった。しかし彼は、アメリカの「タフ・ガイ」の伝統と彼自身の義務感にしたがって「正しく」行動したまでのことであり、アメリカそのものが単純な二分法の論理を克服しないかぎり、またアメリカが「島国根性」[21]を克服しないかぎり、必然的に繰り返し立ち表れてくる「アメリカン・タフ・ガイ」[21]の雛形の１人なのである。

ひるがえって日本の側では、カンターを代表とするアメリカの一方的手口に憤慨するのはけだし当然であったにせよ、カンターの中に「古きよき時代」のアメリカの、しびれるような「タフ・ガイ」の姿を垣間みなかったのは（いやむしろ、古きよき時代の「タフ・ガイ」の中に、カンターの姿を予知しなかったこと、と言うべきだろうか）、アメリカに勝るとも劣らぬ単純さであったと言える。世間の論調は、いちじるしく「これでもアメリカか」に傾き、少なからぬ「文化人」が、彼らの職業的伝統にしたがって日本人を叱責するための範をヨーロッパに求めるようになった（「ゆとり」論者の多くはこの範疇にはいる）。そして実際、アメリカの振る舞いは「無理を通せば道理がひっこむ」を地で行くようなものであったことは議論の余地がない。（日本が市場を開放せねばならぬのかどうかの議論は私の能力を超える。）しかし、「これでもアメリカか」の背景となっているアメリカへの複雑な思いを正面から検討してみる時期が、社会科学にとっても一般の知識人にとっても訪れたのではないだろうか。カンターは、そのための貴重な手がかりを与えてくれたように思う。

6．結　　論

ハーバート・ガンズは、アメリカにおけるイギリスのイメージについてのエッセイで、外国のイメージは自国の夢想を反映している、と論じている[22]。すなわちイギリスは「イートンやオックスブリッジで教育を受けた公僕が、無私の精神に基づき、階級利益や自らの野望を忘れて公務に献身し、力はないけれども愛すべき貴族というスパイスをきかせながら民主的な国家を実現している」国というイメージが支配的であった。このイメージの中心には育ちはよいがそらそうぶらず、公共心に満ちながらきわめて個人主義的な「ジェンルマン」が、長い伝統の中で醸成されてきた智恵を、上品なブリティッシュ・アクセントで語っていたのである。そ

れは単なるイメージではなく、アメリカはそういうイギリスに憧れ、自らもそうなりたいと願っていたのだ。

ところが1960年頃から、この伝統的なイメージはもう一つのイメージにとってかわられる。それによるとイギリス人は「異常なまでのエネルギーとバイタリティに満ち、人目をはばからず懐疑心と皮肉をまき散らす、セックスの権化」となった。それは映画やテレビや音楽を通じて熱狂的に受け入れたイメージであったが、ここでもまたアメリカ人は自らの国にはないもの、自らには禁じられているものをイギリスの中に見ていた。イギリスのエンターテインメントは、アメリカ人がひそかに抱いていた文化的欲求を満たしてくれたのだ。

ガンズのテーマは、ほとんどそのまま日本がアメリカを見る目にあてはめることができる。日本人は野茂の活躍ぶりへの熱狂を通じて、見たいアメリカ像（さすがアメリカ）あるいは日本もこうありたいという像を表現し、カンターの傍若無人ぶりを非難することで、見たくないアメリカ像（これでもアメリカか）あるいは日本はこうありたくないという像を表現したのである。

むろん野茂の活躍する舞台と、カンターの活躍する舞台とは異なる。さまざまな利害や思惑が複雑に絡まっている政治や経済の世界とは異なり、スポーツの世界は、むしろそういう複雑さ、胡散臭さから解放されることが最大の魅力になっている。変身による立身出世という「アメリカン・ドリーム」と「タフ・ガイ」の伝統が、日常生活とは一応峻別された世界で、簡単明瞭な形で見られるのである。白人も黒人も、あるいはメキシコ人もキューバ人も、そしてついには当面の競争相手である日本人までもが国際連合を組んでチームに貢献する、というのはアメリカの建国の理想にピッタリあてはまる。アメリカ人は、この「メルティング・ポット」を見て、ほんのいっとき「アメリカン・ディレンマ」を忘れることができるのではないだろうか。それは、野茂に熱狂する日本人についても言えることだ。（もっともそこには、力道山が空手チョップでルー・テーズをやっつけるのを見たときと同じ、強いナショナリズムが働いていることも確かである。）いつのころからか、アメリカがおかしくなってしまったというニュースばかりを聞かされてきた日本人にとって、野茂と、野茂を受け入れた大リーグは「そうであってほしいアメリカ」を再確認させてくれたのである。

カンターを通してみた「そうであってほしくないアメリカ」は、野茂のケースとは一見逆のようではあるけれども、日本人の憤りのうらには、信じていたものに裏切られた落胆が確かにあった。大国が小国を力を押さえ込む、という例は、歴史上枚挙にいとまがない。にもかかわらずアメリカの強権ぶりが、とくに大きな憤りを買ったのは、強権の対象になったのが他ならぬ日本であったことのほかに、それが他ならぬアメリカによってなされた、という要素が大きい。冒頭に見た各新聞の社説が、カンターの横暴ぶりに憤りながら、一方では日本も市場開放につとめる必要がある、という指摘を忘れなかったのは、アメリカの「やり方」と「考え方」とのギャップに悩む日本の姿をよく現している。日本人は、アメリカはもうだめだ、という落胆を覚えるうらで、ほんとうのところはアメリカにもうちょっと「ちゃんと」していてほしいのだ。

先ほど引用したガンズは同じ論文の中で、アメリカがイギリスに対してもっといるイメージ

は、現実のイギリスとは別物であるが、もともと他国に関するイメージというのは自国の都合に合わせて作り出されるものだと書いている。大リーグの影には経済的な思惑と人種問題が潜み、カンターは「タフ・ガイ」の一変形であり、ブレイディと並んでCCW法がある。それがアメリカの現実なのだ。「正しい」、「一貫した」理解など、しょせんないものねだりである。日本は「アメリカの正義」をあまりにも無批判に受け入れすぎてきた。われわれはこれから先もそれを信じ続けていくのだろうか、あるいは、アメリカにとってのイギリスがジェントルマンの国から奔放なセックスの国に変化したように、「日本の都合」に合わせた新しいイメージを生み出していくのであろうか。

注

（1）　1995年7月22日づけ朝刊。
（2）　亀井俊介、『日本人のアメリカ論』(研究社1977)、p. 9。
（3）　Ibid., p.15.
（4）　Ibid., p.18.
（5）　Ibid., p.23. 下線は柏岡。
（6）　Herbert J. Gans, "Symbolic Ethnicity", *Ethnic and Racial Studies,* Vol.1, No.2 (1979).
（7）　Mary C. Waters, *Ethnic Options* (Berkeley,University of California Press,1990), Chap.3 ; Thomas.J. Archdeacon, *Becoming American* (N. Y. : The Free Press, 1983), pp.145-146 ; Werner Sollors, *Beyond Ethnicity* (N.Y. : Oxford University Press, 1986), *passim*.
（8）　ベンジャミン・デモットは、上級階級のアメリカ人でさえも、生活や行動のそこここに「中流階級らしさ」を演出する様を描いている。Benjamin Demotte, *The Imperial Middle : Why Americans Cat't Think Straight About Class.* (New Haven, Conn. : Yale University Press, 1990.)
（9）　岡田泰男『アメリカの夢、アウトローの荒野』(平凡社、1988), 99；亀井俊介『アメリカン．ヒーローの系譜』(研究社、1993)；本間長世『アメリカ文化のヒーローたち』(新潮選書、1991)；Rupert Wilkinson, *American Tough : The Tough Guy Tradition and American Character* (N.Y. : Harper & Row, 1986).
(10)　『産経』1995年7月29日。
(11)　Michel Crozier, *Le mal americain* (Paris : Fayard, 1980), p.286.
(12)　George H.Williams, *Wilderness and Paradise in Christian Thought* (N.Y. : Harper, 1962) ; Roderick Nash, *Wilderness and the American Mind* (New Haven, Conn. : Yale UP, 1967) ; Edward A. Tiryakian, "Neither Marx nor Durkheim…Perhaps Weber", *American Journal of Sociology,* Vol.81, No.1, pp.1-33.
(13)　Perry Miller, *Errand into the Wilderness* (Cambridge, Mass. : Harvard UP, 1956).
(14)　Perry Miller, *The New England Mind : The Seventeenth Century* (Canbridge, Mass. : Harvard Up, 1954).
(15)　David Riesman, *Individualism Reconsidered* (N.Y. : Free Press, 1954), pp.26-27.
(16)　木村英憲と柏岡富英によるリースマンとのインタビュー、1995年6月13日。
(17)　Benedict Anderson, *The Imagined Community* (London : NLB,1983).
(18)　亀井俊介『アメリカン・ヒーローの系譜』(研究社、1993)、p.13.
(19)　Rupert Wilkinson, *American Tough : The Tough Guy Tradition and American Character* (N.Y. : Harper & Row, 1984).
(20)　Ibid., p. 5.

(21) 原語は「プロヴィンシアリズム」。木村英憲と柏岡富英によるリースマンとのインタビュー、1995年6月13日。

(22) Herbrt Gans, "America's New Sexual Idols," *20 th Century*, Autumn, 1964.